
ノタが家にやってくる Santa Claus is coming to my home

正木 慶史

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サンタが家にやつてくる Santa Claus is coming to my home

【Zコード】

N6826P

【作者名】

正木 慶史

【あらすじ】

クリスマス・イブの晩、突如部屋に乱入してきたのはサンタの格好をした同級生だった。

職業：サンタクロースだが常識人な高校生と、同級生の変人一家が繰り広げる一幕。

会話文オンリーのコメディ風味な何か

(前書き)

初投稿です。至らないところもありますが、そこは生暖かい目で見守っていただいとこの駄作を鼻で笑ってくだされば幸いです。

「メリークリスマス！こんばんは。サンタクロース……だ…」
「よう、こんばんは。というか久し振り、西口。3日ぶりだな」
「な、なんで香川がここに…？」
「なんでと言わてもここは俺の家だしな。居ちや悪いか？」
「で、でもお前は自転車通学だったろ？ここ県外じゃ…」
「ああ俺普段アパートで独り暮らしして高校通つてるんだわ。
で、長期休暇はこうして実家に帰つて来てるってわけだ」
「な、マジか！くそ…県外なら知り合いはいないだろ？と思つたの
に…」
「よくわからんがお気の毒様。まあ茶ぐらいは出してやる」
「ああ、ありがとう。つてなんでクリスマスに煎茶と煎餅なんだよ
…」
「おれの家神道だからな。キリストの誕生日とかぶっちゃけど
もいい」
「そんな宗教的な理由！？」
「あとケーキなんて甘つたるい物がちゃんとおかしくて食えや
しない。というより生まれてこの方ケーキという物を食つたことが
ない」
「なにそのケーキに対する嫌悪感！？」
「いや嫌いなんじゃなくてただ性に合わないだけだ。多分血なんだ
ろうな。俺の妹も見た目天使みたいに可愛らしいのに、三歳の時に
は昆布茶を啜つてさきいかをかじつてたからな。しかしこんな妹で
彼氏が出来るんだろうか？西口どう思う？」
「知らないよ！家庭の悩み相談をするな！」
「いやでもさ、好きなタイプは？つてきいたら、38歳以上で人生
の酸いも甘いも味わつて来た人つていうんだぞ。そりゃあ心配にも
なるわ」

「うん、まあタイプはその人の趣味だから…」

「とはいえ今はもつと大事なことがあるんだがな」

「うん、なんだ？」

「サンタの格好をしている同級生が部屋に乱入してきた場合には警察を呼ぶべきか黄色い救急車を呼ぶべきか、という問題」

「俺か！俺のことか！」

「他に誰がいる。まあさっさと弁明なり釈明をしろ」

「くそつ、なんで俺がこんな目に…ああもう、俺はサンタクロースでこの家にプレゼント届けに来たんだよ！これで良いだろ！」

「うーん、我が家に統合失調症の患者が居ますって119に電話しても救急車来るもんなんのかな」

「全然信じてくれてない！」

「当たり前だ。逆に聞くが普通そんなこと言われて信じるやつがいるか？」

「うつ、それはそうだが…信じてくれ！」

俺は父親がフィンランド人で、父さんがやつてたサンタクロースの仕事を継いだんだ！」

「えつ、お前つて外国人だつたのか？」

「名前と外見見ればわかるだろ。名前は西口・シベリウスだし、髪は日本人の母親と同じ黒だけど目は青だろ」

「はー、そうだったのか」

「入学式の時に言つたんだが」

「ああすまん。多分その時寝てた。しかしお前がフィンランド人だとしてどこにお前がサンタクロースだという証拠があるんだ？」

「うつ、それは…じ、じゃあ表にトナカイを停めているからそれを見てくれ。それなら証拠になるだろ！」

「うーん、そのトナカイって今小学生に石を投げられてるあのトナカイか？」

「マジか！大丈夫かディック！」

「あのトナカイってディックって名前だつたんだ」

「「ひへ、最近のガキはなんで」「ひも…プレゼントやうんぞ」

「おつかれ。どうだつた」

「いやティックを助けようとしたら俺も小学生に石を投げられて、
その上そいつに“若作りサンタ”って言われた…」

「ふーん。でトナカイはどうした」

「ちょっと遠くの山に停めてきた。少し歩くけど背に腹は変えられ
ない…」

「そうか、お疲れ。外は寒かつだらう。コーヒーを淹れたから飲
むか？」

「ああ、貰うよ。…ってなんでそんなに態度が変わつてるんだ？」

「いやお前がサンタクロースだつて分かつたからな。サンタが来た
といつのに何のもてなしもしないとあつちやあ香川一族の恥だ。と
いう訳で歓迎させてくれ」

「うん。つてなんか面映いな… / / /」

「で、仕事は良いのか？忙しいんじやないのか

「いや、俺はまだ新人だからな。仕事が少なくてこの家で最後なん
だ」

「ふーん、じゃゆづくらしていつてくれ。家族の者も歓迎したがつ
ているから」

「ああそうさせてもらひ…って家族！？」

「あら、秀ちゃん。皆が揃つてから入つて驚かそうと思つたのに」

「ちゃん付けするな母さん。ああ西口。これが母親」

「どうも、西口くん。秀の母の薰です。あと秀ちゃん、これつて言
い草は何なのかなー？」

「ははは母さん、チョークスリーパーはひよつときついんじやない
かな」

「だ、大丈夫か、香川！」

「大丈夫ですよ兄さん。あれが母さんと兄さんのスキンシップで

すから」

「そ、そつか。つて君は？」

「次男の奏太です。いつも兄がお世話になっています」

「いえこちらこそ。といつか君話し方が大人びてるね。何歳？」

「12歳です」

「12歳つてことは……小6？うわ、さつきの小学生に見習つてほしいな」

「え？なにがあつたんですか？」

「いやさつき表で小学生の女の子に“サンタ狩りじゃー”つて襲撃されたんだ」

「もしかしてその女の子髪を後ろでひとつに結つてませんでしたか？」

「たしかそうだつたよくな……」

「ならすみません。それ僕の幼馴染みです。あとでたつぱり“オシオキ”しておきますので許してやつてください」

「過ぎたことだからいいけど。というかお仕置きのところで妙なユアンスが入つたんだけど俺の気のせい？流血沙汰はちょっと…」

「いえ、暴力なんか使いませんよ。ただ一晩中ベッドの中でカラダに教え込ませるだけですから」

「そつち方面なの！？」

「だつて華ちゃんがいけないんですよ。襲撃とはいえた他の男と関わつたりなんかして。彼女には僕しかいなってことを一晩中愛し合つて体に叩きこんであげなきや。あ、大丈夫ですよ。ちゃんと避妊はしますから。まだ僕たちは若いから子供ができたからといって結婚は出来ないし、僕だけでは子供の養育もできませんからね。とはいえ大学卒業したらすぐさま入籍するつもりです。それまでは女子校に入れて、他の男どもからは遠ざけますけどね」

「へ、へえ。なかなかいい人生プランだと思うよ……」

「という訳でお兄さん。華ちゃんに変な氣なんて起こさないで下さいね。じゃなきゃ……埋めますよ」

「だ、大丈夫！そんな気は一生起こさないから…」

「なら良かつた。それなら僕とお兄さんは良い関係を築けますね。あ、そういえば紹介するの忘れてました。あやじで「ずくまつているのが姉の由梨です」

「へ、ビーハウズくまつているんだ？」

「いや、どうも…」

「サンタが…サンタクロースが白鬚のおじいさんじゃなかった…」

「どうも姉さんは自分好みのサンタが来ないのがショックだったみたいなんです」

「どうしてなんですか！普通サンタは太ったおじいさんじゃないですか！こんな若いサンタなんてどこにニーズがあるんですか！私はおじいさんサンタを要求します！」

「いや、残念だけど僕が来なかつたとしても、他の若いサンタが来るだけでおじいさんのサンタは来ないよ」

「！？ビーハウス…ですか？」

「フィンランドとかの北欧がみんながイメージしてるようなおじいさんサンタで、ヨーロッパとかのキリスト教国がオジサンサンタ。そして日本なんかの非キリスト教国には俺たちみたいな若いサンタが訪れる決まりになつてるんだ。我慢してくれる？」

「……とこいつ」とはおじいさんサンタは存在するんですね？」

「ああ、本国と、日本の支部に何人かいるね」

「なら良いです。あ、私中学三年の由梨です。いつも兄がお世話になつております」

西口さん、今後ともよろしくお願ひしますね。そしてあわよくば日本支部のおじいさんサンタと会わして下さい。お願いします」

「あ、ああ。機会があつたらね」

「なんだ、もう下の一人と挨拶したのか」

「あ、秀。大丈夫だったのか？クビ」

「ああ、一瞬黄泉の国が見えたけどなんとか踏みとどまつた。つかなんで下の名前を読んでるんだ？」

「いや、みんな香川だから名前で読んだ方がいいかなとおもつて」

「そりいえばそうだな。じゃあ俺もお前を名前で呼ぶか？」

「いや俺の場合名前がシベリウスで長くなるからそのまま西口でい

いよ

丈夫なのか?』

「あ！ いけね。12時30分に先輩と会流しなきや いけなかつたん

「それは引き留めたりして悪かつたな」

「いや大丈夫。仕事するくらいの時間はあるから。じゃあ今からプレゼント渡すよ。ええと。おっこれだな。はいこれが奏太君の」「えっ、僕何もサンタさんに頼んでませんよ」「プレゼントはその人が一番欲しがっているものなんだ。だから頼んでなくても貰えるんだよ」

「へえ、そうなんですか。あつ、これ最近欲しかったものです。」
「番じやないけど」

「あれ、一番じゃないの？おかしいな」

はい 僕の欲しきものハシヤクは1番から10番まで全部華や
やんで埋まつてますから

「へえ、そ、そつなんだ。で何を貰えたんだい?」

失礼します

「うん、さよなら… なあ秀。あれって…」

「まあ完璧に小学生が持つてて良いものじゃないだろうな。華ちゃん

「哀想」

「ありがとうございます。あの、早速開けても良いですか？」

「ああ、開けてござらん」

「じゃあ失礼して…あつ、これ最近欲しかつたけど高くて買えなか

つた本です！嬉しいなあ

「へえ、なんて本なんだい？“世界偉人集”？」

「はい、かつこいいオジサマたちが活躍する夢みたいな本なんですよ…すみません、ちょっと部屋で読んできますね。さよなら」

「嬉々として去つていつたな…」

「本当に彼氏出来るんだろうか？ちょっとお兄ちゃん心配」「じゃあ最後は秀だな」

「うん？高校生なのに貰えるのか？」

「基本18歳以下に渡すことになつてるんだ。だから秀の分もあるよ」

「えー、お母さんは貰えないの？ちょっとショックだわー」

「良い大人がサンタからプレゼント貰おうとするなよ。みつともない」

「ゴメン、秀ちゃん。私耳が遠くなっちゃつたみたいなの。もう一度言つてくれる？」

「お母さまがお美しくて素晴らしいお方だと申しただけですよ。だからアイアンクロ は止めて。お願ひ。顔がめげる」

「大丈夫か秀！」

「ああ、大丈夫。少し頭がへこんだがな」

「そうよー。ちゃんと加減もしたから大丈夫よ」

「…秀、これがプレゼントな」

「おお、これはありがたいな」

「何を貰つたんだ？」

「胃薬一年分」

「…苦労してるんだな、秀」

「いやいや、これでも今日はまだマシな方だぞ」

「そうそう、今日は仕事でお父さんがいないし、西口くんも居たからみんなそこまでハメを外してないからね」

「そうだったんですか。つて時間だ。そろそろ帰らなきや先輩に怒られる」

「そうか、もうそんな時間が」

「あら、もうお別れなの？悲しいわ」

「そうですね…あつ、じゃあ最後にプレゼントを一つ。僕が帰った
ら窓から外を見てみて下さい。じゃあ秀、また年明けに！」

「ああ、今度は学校で。またな！」

「…帰ったわね」

「そうだね、母さん。そういうえば最後にプレゼントがあるとか言つ
てたな。確か窓から外を見るとか…」

「あら」

「おお、雪だ。今日は降らないって予報だつたはずだが

「ホワイトクリスマスなんてなかなか風流な贈り物ね」

「うん」

「…」これは私へのプレゼントになるのかしらね。私プレゼント貰つ
てないし、最後に西口くん私にこれを言つて帰つたから

「…母さん、誰へのプレゼントとか考えないで、もう少し子供に感
慨とか感傷とか持たせてくれよ…」

(後書き)

ヤマなしオチなしそれに地の文が無くて見づらいとい「ヘレン・ケラーもびっくりの三重苦。作者の文才の無さが見え隠れします。

以下キャラ設定などちょっとした付け加え

西口・シベリウス

サンタ・フィンランド人・苦労性な常識人の3言で片付く高校一年生。
美形、成績優秀、運動神経抜群とまるで少女マンガのテンプレだが
生来の運の悪さがにじみ出てあまりもてない。

香川 秀

香川家長男。家庭では妹と弟、両親の暴走を抑える比較的常識人。
しかし自分が気に入った人物をからかって遊ぶ悪癖がある。西口と
は親交はなかつたがこの件をきっかけに親友になる。

香川 由梨

香川家長女。男は30超えてから、が信条の美少女。好きな髪のタ
イプはふんわりもさもさ口ひげ。好きな人は今のところシャルルマ
ニユ。理由は有り余るほどの貫禄と顎鬚。

香川 奏太

香川家次男。幼馴染を溺愛する腹黒鬼畜ショタ。最初はもうちょっと
と常識人になる予定がこんなことに。プレゼントのイイモノは、説
明した瞬間この小説にR-15タグがつくような物。

香川家母。子供への愛情表現はアイアンクローな奥様。いつもはお
しとやかだが無礼な発言には制裁をかます大和撫子。

語句説明

めげる

広島弁で壊れる的な意味の言葉。使つた意味は特になし。

サンタ狩り

子供たちの間でいま最も熱い遊び。サンタの袋の奪取を目的とする。

「い」までお付き合いで頂きありがとうございます。

「こんな駄文読むくらいなら寝てたほうがましだ」、「こんな文章
をいけしゃあしゃあと世に出せる作者の厚顔つぱりに驚いた」など
思わず、すこしオブリークトに包んで感想、批判を下されば作者は死
ぬほど喜びます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6826p/>

サンタが家にやってくる Santa Claus is coming to my home
2010年12月24日02時10分発行